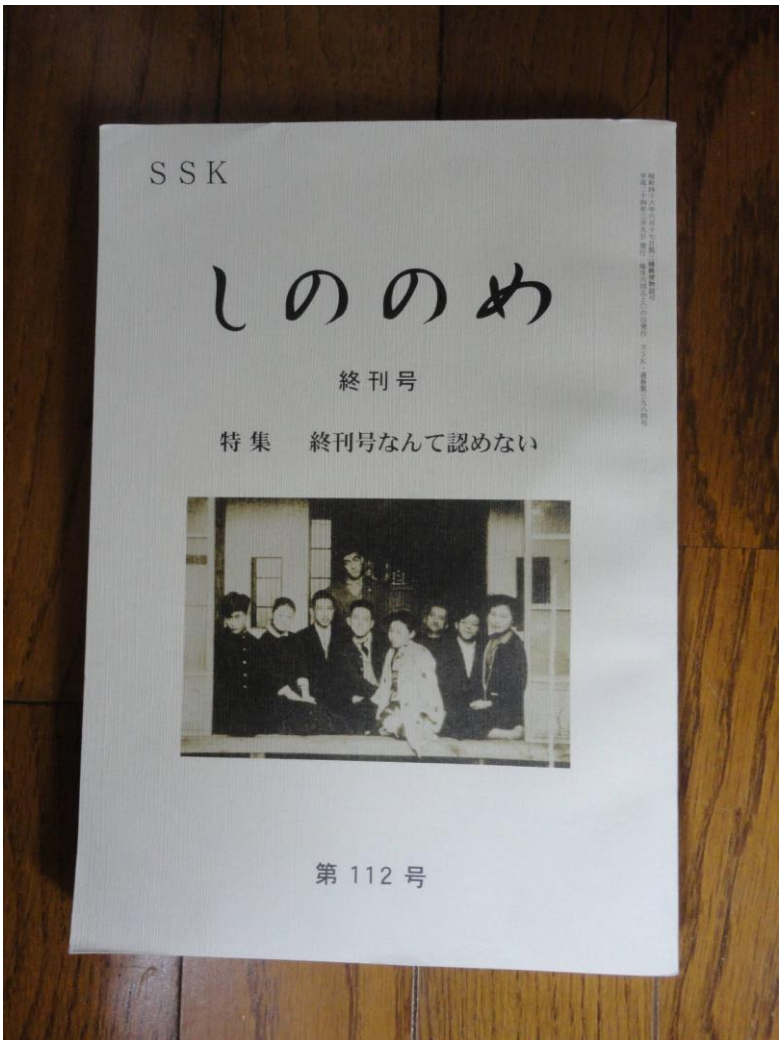
第 64 回・歴史教育者協議会全国大会（千葉大会）レポート
第２１分科会（障がい児教育）

レポート名：障害者文芸誌『しののめ』について花田春兆さんに聞く
―花田さんへのインタビューを通じて―

日時：2012 年 8 月 3 日（金）～8 月 5 日（日）
場所：千葉大学（千葉市）



報告者：竹下　忠彦
東京都立府中けやきの森学園
（東京都歴史教育者協議会・町田支部）

はじめに

　　１９４７年５月に創刊された障害者文芸誌「しののめ」が、２０１２年３月終刊号を出版し、その使命を終えた。終刊号を出版した直後の同年４月に「しののめ」の主宰者である花田春兆氏にインタビューを行った。本報告は、その記録である。今後の障害者文芸誌「しののめ」研究にあたっての手がかりにしていきたい。

インタビュー：障害者文芸誌「しののめ」について花田春兆[1]氏に聞く。

日時：２０１２年4月１５日（日）１３：３０～１５：００
場所：東京都港区・K苑
話し手：花田春兆氏
聞き手：竹下忠彦、A・Sさん
記録：竹下忠彦

①「しののめ」の発行部数について教えてください。

　花田さん：「しののめ」は最初回覧雑誌として始まりました。「ガリ版」印刷の時は、部数は５０～１００部くらいだったと思います。筆耕印刷からタイプ印刷に移ったのが４０号です。タイプ印刷になってからは、公称５００部、実質３５０部くらいの発行部数でした。発行部数を多めに公称し、支援を多くもらおうと考えました。
（尚、「しののめ」の最終号は１１２号（２０１２年３月刊行）である。）

②「しののめ」の投稿者は、障害者だけだったのでしょうか。またこの場合の障害者とはどのような範囲のものでしょうか？

　花田さん：編集者である私としては、「１０割ＣＰ（＝脳性マヒ）の雑誌」という意識です。投稿者や会員の属性は、４０号や７０号等に名簿が掲載されているはずで、それを調べてみれば分かると思います。

③「しののめ」の読者の階層を教えてください。

　花田さん：「しののめ」は会員制をとっています。会員は正会員と賛助会員からなります。正会員の条件は「身体障害者」です。年会費を支払い、雑誌「しののめ」に投稿ができます。その他に賛助会員があります。賛助会員の条件は、「しののめ」を「理解し支援する方」で、やはり年会費を支払います。賛助会員の中には健常者の方がいます。賛助会員数のピークは、１９７０年代半ばで、１５０名くらいだったのではないでしょうか。健常者が多かったと思います。

④「しののめ」の会員は、全国各地にいたのですか？

花田さん：はい全国各地に存在しました。北海道の方もいますし、九州の方もいます。昔は会員を増やすためにラジオの放送と郵便を大いに利用しました。昔ラジオ放送に「療養文学」という番組があって質の高いラジオ視聴者の質の高い文芸作品が放送されていました。それを注意して聞いていて、めぼしい作者に手紙を出し、「しののめ」会員になることを勧めました。「一本釣り」をしたのです（笑)。こうして会員をふやしていきました。

⑤障害者文芸雑誌「しののめ」の他の文芸誌と違う点は、どこにありますか。

花田さん：「一人一人が好きなことを自由に表現できること」にあります。一つの雑誌にキリスト教徒と社会主義者が共通のテーマをめぐって、作品を掲載することが可能な雑誌です。

⑥「しののめ」の創刊時のメンバーはどなたでしょうか？

花田さん：花田春兆（政国)、土井伸哉（正己)、高山久子、石橋玲二（玲児)、山北厚等です。

⑦戦前光明学校で作られていた校内誌「うなばら」のメンバーは、どなたでしょう？

花田さん：私の１年上の先輩達で私より１年早く補習科に進んだ人たちです。残念ながら「うなばら」は現存していませんが、俳句を中心にしたものでした。私も、６年生の時、投稿して作品が「うなばら」に掲載されました。

⑧「しののめ」に執筆をしてくれた著名人を教えてください。

花田さん：作家の田中澄江さんや、医師の松田道雄さんです。

⑨「しののめ」の発行のための費用は、どのようにまかなわれたのでしょうか？

花田さん：会員からは、会員数の半分も徴収できていなかったかもしれません。一度会員になると会費に支払いがしばらくなくとも、何年も名簿から消去することはありません（笑)。

寄付をいろいろな方にしていただきました。個人寄付が多かったです。また、美濃部都知事時代に東京都教育庁から５年間ほど補助金が出ていました。

なお、この補助金によりつくったのが「別冊しののめ」で、東京都障害者福祉会館[(2)]の倉庫にあるはずです。

⑩「しののめ」の存在が、社会に影響をあたえたと思えることはありましたか？

花田さん：「安楽死」を特集した「４７号」（１９６２年４月）の社会的反響は大きかったです。
また、「しののめ」はある時期、別冊を出していましたが、別冊を単行本として世におくったことがあります。この単行本は「しののめ」読者以外の方にも読まれたと思います。

⑪「しののめ」の社会的な存在意義について花田さんが考えていることを教えてください。

花田さん：「しののめ」は私たち同人の機関誌です。機関誌の中には、障害者の実生活の中から湧くさまざまな思いが、障害者自身の声で綴られています。　仲間同士の呼び掛けはもちろん、社会への訴えにしても、普段着のなまの声で語られています。障害者自身を知るには、まさにまたとない絶好な第一

次資料であり、リアルタイムに綴られていく生きた歴史でもあります。また機関誌が社会に向かって開かれた窓である、という意義は大きいと思います。　私たち、脳性マヒを主体にした身体障害者の文学愛好者グループの〈しののめ〉は、次第に障害者問題への発言がウエイトを増してゆきました。文学という表現の立脚点を守りながら、一時期は障害者運動をリードする勢いでした。「しののめ」誌上は主張を展開する場であるとともに、行動をリアルタイムに記録する場ともなっていました。

おわりに

＊「しののめ」の創刊メンバーには、１９３２年創立の光明（こうめい）学校（現都立光明特別支援学校）の卒業生が多く関わっている。彼らの文芸創作活動と関わって、彼らが学んだ光明学校の教育課程や卒業後の境遇を調査してみることは、障害児者の歴史研究の上にも研究課題になるだろう。

＊主宰者花田氏は障害者の範囲を肢体不自由とりわけＣＰ（脳性マヒ）ととらえていた。この雑誌をＣＰ者中心につくろうとした。このように花田氏が障害者を狭くとらえていたことは、興味深い事実である。なぜ、このように限定したとらえかたをしていたのか、あるいはせざるを得なかったのか[(4)]。今後の研究課題となるだろう。

＊会員は次第に拡大し、全国に及んだという。その要因についてはインタビューでは明らかにならなかった。雑誌「しののめ」の文芸活動が、その後の日本の障害者運動に大きな影響をあたえていることは、夙に研究者が指摘しているところ[(3)]であり、このことも研究課題となるだろう。なお会員の拡大手段は主としてラジオ、郵便であった。

＊「しののめ」が新聞や雑誌の記事になったことも多かったという。花田氏が社会的影響を与えたことのエピソードとして、「安楽死」問題の特集号の反響をあげていた。この象徴的なテーマをとりあげた第 47 号の内容や社会的影響を分析してみることも、興味深い研究テーマである。

注

(1)　花田春兆

俳人、著述業。障害者文化の研究と実践活動。1925 年生まれ。本名・政国。出生時よりの脳性マヒにより、歩行・起立不能。言語障害あり。東京市立光明学校(現・都立光明特別支援学校)研究科終了。47 年、研究科時代の友人数人を軸に身障同人誌『しののめ』創刊。57 年、俳誌『万緑』に参加。中村草田男先生に師事。以後、角川俳句賞推薦、俳人協会全国大会賞受賞、万緑賞受賞。80 年、国際障害者年推進日本協議会(現・日本障害者協議会)副代表。82 年、総理府障害者対策推進本部(現・内閣府障害者施策推進本部)参与など、国・地域・文化の各種障害者運動に参画。総理大臣・都知事表彰、朝日新聞社社会福祉賞受賞

(2) 東京都障害者福祉会館　〒108-0014 東京都港区芝５－１８－２　電話 03-3455-6321
図書資料室の機能があり、障害者関係団体の定期刊行物を一定程度保管している。

(3) 例えば、岡知史は社会福祉学研究の立場から、荒井裕樹は、日本近現代文学・障害者文化論研究の立場から、「しののめ」の存在意義と社会に与えた影響について指摘している。

岡　知史「日本のセルフヘルプグループの基本的要素」(『社会福祉学』, vol.33-2 ,1992)
荒井裕樹『障害と文学』(現代書館、pp25－151, 2011)

(4) 筆者のこの指摘に対し、元光明養護学校教員で障害児教育史研究者でもある松本昌介氏は、「障害者の範囲をＣＰと捉えたのではなく、しののめ同人をＣＰに限定したということではないか。理由はいろいろあるが、他の障害者が入ると引き回されるという危惧があったのではないか。」とコメントを寄せている（２０１２年７月８日)。